

どう護るか、生物多様性ホットスポット

県立茅ヶ崎里山公園に学ぶ

9月4日(日) 10:00~15:00

講師 茅ヶ崎野外自然史博物館 岸 一弘氏

神奈川県自然保護協会では、昨年生物多様性ホットスポットの選定発表をしました。

生物多様性ホットスポットは選定すれば終わりではありません。その後維持するための努力が必要です。

都市公園のような所での管理では生態系管理という考え方が重要です。

これを行政だけにたよるのではなく、市民も加わることで、よりレベルの高い管理を目指すことができます。

これを実践してきたのが茅ヶ崎里山公園です。ここで考えを学び、他のホットスポット選定地への参考にしたいというのが今回のねらいでした。

講師として、公園運営会議発足時からここに関わってきた市民団体「茅ヶ崎野外自然史博物館」の岸一弘氏にお願いし、午前中はパークセンターでお話を伺い、午後は現地で実践のあとを見させていただきました。

ここでは、午前中のお話の部分を紹介します。

※ 表記について：茅ヶ崎市の「が」は“ヶ”ですが県立茅ヶ崎里山公園の「が」は“ケ”です。



里山公園マップ

里山公園の管理について、生態系管理が大事だということで、そのあたりの話をしたいと思います。

もくじ

- 1 柳谷（茅ヶ崎里山公園）はどういう場所にあるか
- 2 柳谷（やなぎやと）の自然と生物相
- 3 なぜ谷戸が大切なのか
- 4 茅ヶ崎市の自然環境評価の中で柳谷の位置づけ
- 5 日本の生物多様性に迫る危機

- 6 過管理による生物多様性の低下
- 7 生態系管理の必要性

1 柳谷（茅ヶ崎里山公園）はどういう場所にあるか

はじめにここにどのような環境があり、どのような生き物がいるのかお話しします。

茅ヶ崎里山公園は神奈川県の中南部に位置します。

茅ヶ崎市は市域の3分の2ぐらいが低い土地で、北部に丘陵地域があり、里山公園はその一角になります。

市内の中では自然が残っている地域なのですが、東側を見ると、湘南ライフタウンのように丘陵を崩して住宅地ができていたりしています。

柳谷は、南から北に向かって開けている谷戸地で、近くを小出川が流れています。

里山公園の中にはもう一つ谷戸がありまして、中ノ谷（なかのやと）といいます。こちら側は公園化する際に結構改変を受けたので、芝生の多目的広場とか、こどもの村というこどもの遊び場があり、自然環境はあまり残っていません。

いずれにしても、二つの谷戸が含まれるのがこの里山公園です。

柳谷は、県内としてはそんなに大きくはないのですが、茅ヶ崎では一番大きな谷戸で、この一つの谷戸で 24 畝ぐらいあります。

茅ヶ崎の北部から藤沢西北部のあたりは全部「谷」一つで【やと】と読ませています。場所によって当てている漢字が違ってきます。鎌倉などでは【やつ】ですね。扇ガ谷とか佐助ガ谷など。同じ谷戸地形なのですが、場所によって読み方が違ったりします。

場所によっては谷に「津」をつけて、【やつ】と読みだり、北関東の方に行くと、谷に「地」を入れて「谷地」といいます。いずれにしても、まわりと比べて低くなった地

形の事を言います。

茅ヶ崎の北部には柳谷以外にもいろいろな谷戸環境があり、近くには清水谷（しみずやと）、行谷広町（なめがやひろまち）、赤羽根十三図などの谷戸地形があります。

2 柳谷の自然と生物相

環境ごとに代表的な生き物を紹介します。

【樹林地】

（昆虫）

ヤマトタマムシ 幼虫がエノキとかケヤキの材を食べるので、そういう木がないと見られません。

クツワムシ 植物の葉を食べますが、住んでいる環境が林のヘリのブッシュです。林縁にまとまった草むらがないと見られません。



林縁のブッシュに生息するクツワムシ(み)

ヒラタクワガタ 古い木があった方が良いでしょう。あまり新しい木ばかりだとなかなか見られません。神奈川県では減っていて、レッドデータ2006では絶滅危惧Ⅱ類に位置づけられています。県内全体で減っています。

トゲナナフシ ナナフシの仲間で、体にとげがいっぱいあります。林縁の下側の湿った環境が好きです。林縁が乾くといなくなります。

というわけで、樹林地でもいろいろな環境の要素がないとたくさんの種類の昆虫が生息できません。

（野鳥）

オオタカとフクロウは猛禽類で、いろいろな動物を食べます。餌になる動物が住めるような広い環境がないと生息できません。

ウグイス よく藪にウグイスと言われるように、藪が必要です。藪に営巣するので、林をきれいに刈り払いすぎて、すけすけにしちゃうといなくなります。

ヤマガラ 樹林地の中でもどちらかというと、常緑広葉樹が好きなので、そういった林があると安定して生息できます。

【湿地環境】

柳谷の中で、結構重要なのは湿地があることで、湿地があるので生き物の多様性が保たれている所があります。

湿地と言ってもいろいろなタイプがあり、それぞれに住む生き物が違います。

ツマキホソハマキモドキ ツマキというのは羽根の先が黄色色というかオレンジ色っぽい色をしていて、細身です。ハマキガというグループがありますが、それに似ているけどそうじゃないよということです。結構小さなガですが、美

しい種類です。

このガが生息するためには、幼虫が餌とする湿地に生えるショウブ（セキショウの場合もある）が必要です。そのため、県内でもかなり局所的にしか見られない種類です。シオヤトンボ 初夏に出るトンボですが、このトンボのヤゴが住むのはアカバナなど湿地性の植物が生えているようなところですね。一見水がないようで踏み込むと水がジュクジュクっとしみ出てくるような、ちょっと見るとトンボのヤゴなんかいないんじゃないかと思うような水深のあまりないような湿地が生息地です。

カヤネズミ 日本最小のネズミです。カヤネズミがいるのは名前の通りカヤ原なんですね。湿地の場合はオギ、乾いたところではススキ、あるいはカヤツリグサ科などの葉で巣を作ります。

キンヒバリ 小さなコオロギです。最も好きなのが、ヨシです。ヨシ原にはいっぱいいます。

湿地と言ってもショウブが生えていたり、ヨシがあったりオギがあったり、様々なタイプの湿地があればあるほどそこに見られる昆虫など動物の種類も増えてきます。



ヨシ原の中で鳴くキンヒバリ(み)

【流れ】

谷戸のきれいな流れにも、いろいろな生き物が見られます。

オニヤンマ 写真は雌が産卵に来ているところです。オニヤンマは日本最大のトンボですが、ヤゴは小さな流れに生息しています。

ホタルトビケラ 成虫になるのは11月、晩秋です。水質の良い流れが必要な昆虫です。

シマアメンボ アメンボの仲間はほとんどが止水性ですが、シマアメンボのみが唯一流水性です。

サワガニ カニの仲間では唯一海に下らないで、谷戸などの流れの所で一生を暮らしています。

このような種類が、湧き水の水質の良い流れの環境に見られます。

【草むら】

乾いた草地 乾性草地といえます。

（植物）

ツリガネニンジンやチガヤ（フシゲチガヤ）。

ヤマラッキョウ 茅ヶ崎ではかつて何カ所かで見られたのですが、今、市内で見られるのはこの柳谷だけになりました。

ナンバンギセル 半寄生の植物で、ススキ、オギとかミョウガなど、そういった植物があるところに出ています。

(昆虫)

シヨウリョウバッタモドキ バッタの仲間です。このバッタはススキとか、チガヤがないとだめですね。そういう草むらがまとまってあるところにいます。

ちょっと湿ったところには、オギが生えます。オギの群落にクズがかぶっている所があります。こういう環境を見ると草を刈りたくなる人が多いのですが、こういう環境でないと棲めない虫が結構います。それが、スズムシ、マツムシ、カントンです。ちょうど今シーズンなので、夜になると鳴き声が聞こえます。鳴く虫の仲間では、この3種類が一番有名ですね。この3種は、このようなオギなどの高茎草本が繁っている草むらでないと見られないんですね。ですから、こういう環境も計画的に残してあげないと、きれいな鳴き声で鳴く虫がいなくなってしまう。

【アズマネザサの群落】

アズマネザサも増えすぎるとあまりよくないので刈らないといけないんですが、この環境に生きる生き物もいます。

最も有名なのはゴイシシジミ、肉食性です。ここにいる白いササコナフキツノアブラムシというアブラムシを食べて育ちます。笹の葉にこのアブラムシがいてゴイシシジミの幼虫が育ちます。成虫はとてもきれいな色をした蝶です。

このゴイシシジミと同じような生態をしているのは、セグロベニトゲアシガです。背中に黒い帯があって、紅色で足にとげがあります。ゴイシシジミと同じようにアブラムシを食べる肉食性のがです。

ヒカゲチョウ 幼虫が笹の葉を食べます。なので、アズマネザサも無くしてはならない植物です。

ここまでが環境ごとにいる生き物の紹介でした。

次は柳谷を特徴付ける生き物を紹介します。

(植物)

トウゲシバ、コモチシダ、ウワバミソウ、アマナ

茅ヶ崎ではトウゲシバとアマナはなぜか柳谷にしかありません。

ウワバミソウも柳谷以外では堤にあるだけの希少な植物です。

他の場所に行くと普通にあるコモチシダは、茅ヶ崎では非常に少ない植物です。なぜ少ないかというと、茅ヶ崎では崖地の環境が極めて少ないんですね。ですから、茅ヶ崎では大事な植物になっています。



崖地に生育するコモチシダ

(昆虫)

ウチワヤンマとコフキトンボ

柳谷が里山公園として公園化される前はいませんでした。

公園にするというのは、開発行為なので必ず調整池を作るんですね。そのため作られた、芹沢の池にこれが飛んできて発生するようになりました。公園ができてから見られるようになった生き物です。今年はウチワヤンマガすごく多くて、羽化時期に調べたら羽化殻が 30 個以上見つかりました。

ウラナミアカシジミ ゼフィルスの仲間の蝶です。茅ヶ崎では絶滅したと思われていましたが、去年から記録がはじめて、今年は柳谷でまとってみられ、復活してきたのかなと思います。原因は良く分かりません。

コシアカスカシバ 腰が赤いこのスカシバは極めて希な種類で、今まで県内では生田緑地で2つ記録があるだけでした。ところが、この湘南地域で遠藤にある笹窪谷とここで発見されました。今のところ県内で4例か5例しかない極めて希なガの仲間です。

セアカクミアシサシガメ 細いサシガメです。谷戸の湿地のヨシとかオギの生えている湿地でしか見られない、湿地性のサシガメです。調査不足と言うこともあるのですが、今まで県内で記録がありませんでした。私が報告して県内での初記録になったのですが、調べれば他の谷戸でも見つかるのではないかと思います。

ウマノオバチ 割と少ない種類で、湘南地域以外では厚木のあたりでは見つっていますが、あまり見られない蜂ですね。

ツノトンボ 開けた草むらが必要で、今そういった草むらがどんどん無くなっているのがだんだん見られなくなっています。

ヒメツクムシ ササキリモドキ科というバッタの仲間ですが、これもかなり希です。湘南平に行くと結構いますけど茅ヶ崎ではこの柳谷で2例見つかっただけです。



茅ヶ崎では希なヒメツクムシ

(脊椎動物)

シロマダラ ヘビの仲間で、夜行性が強くて昼間出合うことはほとんどなく、見る時は大概轢かれて死んでいる個体です。この写真は、他の人が撮ったものですが、堆肥場をひっくり返していたら中からでてきたものです。

マムシ 少ないですが、記録があります。

カシラダカ 冬鳥ですね。湿地のオギとかヨシのまとまった草むらがないとなかなか群れが見られません。

ホンドイタチ 昔は川や池に普通にいたのですが、今は川

の環境が非常に悪くなっていて、川ではなかなか見られな



湿地に多いカシラダカ

なっています。藤沢の引地川では結構いるのですが、小出川では見られなくなりました。柳谷では、最近も確認できています。

(柳谷で記録されている生物の種類)

植物が 680 種ぐらい、昆虫が 1150 種ぐらいです。昆虫で良く分かっているのは、トンボとチョウと直翅類で、他はまだ調査中です。ちゃんと調べれば 3000 種は超えると思います。クモは 76 種。これもまだ増えますね。甲殻類も小型の種類があるので、まだ増えてくると思います。

淡水魚類は、柳谷ではほとんどいません。もともといたのはおそらくドジョウだけです。それ以外のものは移入種です。バス類、メダカ、モツゴももともとは記録がありません。芹沢の池にはカワセミがいるのですが、この写真が撮りたくてもツゴが放流されたようです。こういう風にして入れられた種類が多いということです。

両生爬虫類では、カエルの仲間が 5 種、ヘビとかトカゲが 11 種。鳥は 97 種類、哺乳類が 12 種です。これも在来のものだけではなくて、アライグマやハクビシンのような外来のものも入っています。

こんな所が今、柳谷で記録されている生物の種類です。

3 なぜ谷戸が大切なのか

生物の視点から、谷戸が大切な理由が 2 つあります。一つは、もともと谷戸環境(特に湿地)に依存する生物が見られることです。もう一つは、周辺の開発により谷戸でしか記録されなくなってしまった生物が見られるということです。これらの生物は、谷戸環境がなくなれば行き場を失い、絶滅してしまうことでしょう。

4 茅ヶ崎市の自然環境評価の中で柳谷の位置づけ

今から 10 年少しほど前に、茅ヶ崎市では市内を北から南まで、全部で 76 地区に区分して自然環境評価調査をしました。(これによって、柳谷という環境が行政としても重要性を認めるところとなりました。)

調査では全部の種類を調べるのは無理なので、専門家チームにより指標種をきめ、それが確認できるかどうかという形の市民参加の調査でした。

樹林の指標種、草地の指標種、水辺の指標種、というような形で、植物とか鳥とか両生爬虫類、昆虫で合わせて 150 種ちょっと、これがあるかないかで相対評価をしました。

その結果、柳谷、行谷、清水谷など 7 箇所が市内で重要な場所ということになりました。

大体は市の北部で、7 分の 5 が北部に集中しています。今日来ていただいている柳谷、さっきお話しした清水谷と行谷と赤羽根十三区、あともう一つ以前女子美術大学があった場所(甘沼長谷)で、草地と樹林がある所です。

他の 2 つは相模川の河川敷、海岸河口の柳島です。

5 日本の生物多様性に迫る危機

ここで、ちょっと話を広げます。日本全体で生物多様性が危機に瀕していると言うことで、その理由が 4 つあると言われています。1 番目は開発や改変。2 番目が里地とか里山の手入れが足りないこと。3 つめは外来種が入ってきていること。4 つめが地球温暖化。この 4 つが言われていますが、茅ヶ崎に置き換えても同じことが起きています。それによって絶滅種が出たり、絶滅危惧種が増えたりしています。

まず開発による例について。

ここから少し南に行くと、「みずき」という住宅地になるのですが、駒寄川という小出川の支流、相模川の孫になる川があります。川があるということは、元は湿地だったのです。ある時期までは田んぼとして耕作されていたところが埋め立てられて、今住宅地になっていることです。この開発によって、湿地環境がまったく無くなってしまいました。

何でそういうことが起きたかということ、やっぱり人が増えたからです。茅ヶ崎市の人口は 1930 年の頃は、2 万 2 千 7 百人でした。ところが、1960 年ぐらいを境に急増し、平成 28 年 9 月の時点ではこの狭い茅ヶ崎市に 24 万人弱、ものすごく増えています。人が増えれば、当然生き物の住むところが減ってしまいます。さらに茅ヶ崎の場合、よくないのは人口密度が高いということです。周辺の藤沢市や平塚市と比べて高く、6680 人/km²の人が住んでいるということは、それだけ緑地が無いということです。

かつての環境はどうだったかということ、1980 年代の空撮の写真と比べてみましょう。現在文教大学のある行谷、柳谷辺りは農村集落で、点々と家があるくらいで、あとは樹林地か耕作地がずっと広がっていました。こういう環境が北部では結構広がっていました。ところが、人が増えてきてだんだん緑地が減って来ています。

湿地が無くなるということは、盛り土されると言うことです。こういう環境になるといっぺんに乾いて、外来植物がどんどん増えていきます。

樹林地においても、もともと雑木林が結構広がっていた場所が皆伐されると、いっぺんに環境が変わっちゃいます。平塚の例ですが、オオムラサキが結構見られたところが、今ではほとんど見られなくなりました。環境をいっぺんに変えてしまうと、ものすごく影響があるということです。

赤羽根と言うところでは湿地がずっと広がっていたのですが、農地改良をして田んぼを全部真ん中に集めました。乾田化したわけです。冬になると水が全然ないんですね。乾田化すれば、その中で冬を越す水生の生物は生きられなくなってしまいますので、一挙に生き物の種類が減ってしまいました。

これが一つ目の開発や改変の影響でした。

二つ目は人の関わりが減ってしまったということです。

もと女子美大があった所では林に全然手が入らなくなると、林床にアズマネザサがいっぱい生えてしまいました。

さきほどアズマネザサも必要なんですよと言う話をしましたが、まったく手を入れないと大変です。

もっとひどいのが竹林ですね。樹林だったところにモウソウチクが侵入して、竹林化が進行しているのがよく見られます。放っておくと倒れた竹がそのままになって、林床がどんどん暗くなって、林床植生が非常に貧弱になってしまいます。

アズマネザサより竹林の方が非常に問題になっているということです。

三つ目は外来種で、皆さんよくご存じと思いますが、柳谷でもウシガエルと、ミシシッピーアカミミガメがいます。またアライグマもいます。幸いまだクリハラリス (タイワンリス) は一回確認されただけで、まだ定着していないようなので、入ってこなければと願っています。

こうした生き物が入ってくることにより、他の生き物が減ったり、いなくなったりということが起きます。ウシガエルとミシシッピーアカミミガメは芹沢の池で確認されているのですが、根絶はできないまでも減らさないといけないと思っています。一昨年と去年、池の水を抜いて駆除作業をしました。一旦減ったかと思ったのですが、だめですね。また増えて来たので、やはり継続的に駆除作業を続けないと厳しいかなと思っています。



芹沢の池の外来種駆除作業で捕獲された多数のウシガエル幼生

外来種ではないのですが、南方系の生き物が増えているという状況があります。南方系種の影響で生態系が変わっているかどうか、茅ヶ崎あたりではまだはっきりしないのですが、事実として、南方系の生き物が発生するようになり、種類数が増えてきたりする現象が見られます。

特に目立つのは、昆虫の中では蝶の仲間です。ナガサキアゲハは1990年代にはまだほとんどいませんでしたが、2000年代以降すごく増えて来ました。クロコノマチョウは少し早く、1990年ぐらいからですね。ツマグロヒョウモンとかムラサキツバメはナガサキアゲハと同じで、1990年代の後半ぐらいから記録が増えるようになりました。

ガの仲間では、クロメンガタスズメという種類ガがいます。いろんな植物を食べるので、どこでも発生し、特に野菜のピーマンとか唐辛子のような葉っぱも食べます。侵入したのは2007、8年なのですが、最近はあまり見られなくなりました。

侵入した種類は入ってきてしばらくはものすごく増えるのですが、そのうち落ち着いたりいなくなったりすることがあります。入ってきたからと言って定着するとは限りません。

キリギリスのなかまでヒサゴクサキリという種類がいますが、一時より減りました。ヒサゴというのはひょうたんのことで、上から見ると胸の上側の部分がひょうたんのような形をしているので、この名前がつきました。

カメムシでは肉食性で白っぽいヘリがある、シロヘリクチプトカメムシという種類が普通にいます。

クモでは、スズミグモが2000年代後半から茅ヶ崎、主に柳谷ですが、結構見られるようになりました。

植物は分布を広げないんじゃないかと思われるかもしれませんが、広がっている種類があります。

タシロラン 昔はほとんど見られなかったのですが、湘南エリアとか三浦エリアに行くときちこのすごい数が見られるようになりました。

マヤラン タシロランほどではないですが、あちこちで記録が出るようになりました。

キジョラン 湘南エリアでは1990年代前半には全く記録がなかったのですが、1990年代後半に大磯で見つかったのを皮切りに湘南各地で発見が相次いで、どんどん増えています。これをアサギマダラの幼虫が食べます。キジョランが増えたことによってアサギマダラが安定して生息するようになった、という影響も出てきています。

カラタチバナ これも結構増えています。このように植物でも今まで全くなかったり、少なかったものがだんだん増えていくという現象も見られます。

6 過管理による生物多様性の低下

先ほどの話の続きになりますけど、生物多様性に危機を及ぼす原因が4つあるといわれていますが、都市近郊では私はもう一つの危機があると思っています。それは過管理で、管理のしすぎによって生物多様性が損なわれることが少なからずあります。

これからいくつかそういう事例を紹介します。



乗車式草刈り機による草刈り

まず土手の草刈り。刈り払い機を使っていっぺんに土手の草を刈ることはよくやられますが、住んでいる小動物や昆虫は逃げ場がないのでひとたまりもありません。ツリガネニンジンみたいに刈り圧に強い植物はまあ良いのですが、植物でも種類によって影響が出ます。人が乗って草刈りをする装甲車のような機械があるのですが、これを使う

と短時間で斜面に全く草がなくなってしまう。
こういう刈り方の管理をするとどうなるかという、も



草刈り後に繁茂したワルナスビ

ともと在来植物があった所が、外来の植物で置き換わるとい現象が起きます。こういう機械を使った管理というのは気をつけないといけないと思います。

湿地の流れでは、流れと水辺との高さの差があまりなく、トンボのヤゴやホタルの幼虫が上陸して羽化したりできるのが理想的な環境です。

管理しやすいようにコンボで溝を掘って水を抜く事があります。こうすると湿地とまわりの水辺を生物の行き来ができなくなります。さらなる問題は、こうすることにより水面が下がり、湿地の乾燥化をもたらします。こういう管理はよくないということですね。

雑木林では、年数の経った木まで伐ってしまうことがあるのですが、30年以上経つと萌芽しなくなるものが多いので、木を伐るときは若い木を選択し、老齢になった木はそのまま残した方が良いでしょう。

谷戸底を再生するとき、見た目をよくするために開放的な池を造ったり、一部を埋め立てて畑にしたりすることがあります。いずれも本来谷戸の湿地にはない環境なので、再生の仕方としては良くないと思います。

谷戸底＝谷戸低地の管理として、見た目は雑然としますが、いろいろなタイプの湿地を残してあげることが大事です。

田んぼ以外に水溜まりがあったり高茎の湿性草地があったりという環境の変化があれば、いろいろな生き物が見られ生物多様性の視点から望ましい管理です。

再生するとき、全部田んぼにしてしまうと見た目はきれいですが生き物的には極めて単調な環境になります。

7 生態系管理の必要性

生態系管理という言葉はなじみのない言葉ですが、英語では ecosystem management です。

地域固有の生態系に留意し、教科書的な管理ではなく、その場所の生物相を良くわかっている人がちゃんとその生物相を保全できるための管理の仕方を考えてやりなさいと言うことです。よくありがちなのが、ゲンジボタルを守りましょうとか、「……」という植物を守りましょうという、特定の生物種を守ろうということに偏ってしまうことです。そうすると、全体の多様性が落ちてしまう可能性が出てきます。トータルなバランスを考え、そのためには、植物だけとか、昆虫だけの視点で考えてはだめです。いろん

な生きものにとって望ましい管理をすることは難しいのですが、ベターになるような管理の仕方を考えるというのが必要なことです。

生態系管理の具体的な手法のひとつとして、順応的管理というのがあるのですが、これがすごく大事なことです。人間がこうやって管理すれば良いんじゃないかとやってみても、それが正解ではなく、失敗することもある。その結果をモニタリングしながらちょっとやり方を変えてみる、その繰り返しを重ねフィードバックしていくやり方が必要です。

管理をする場合には、全部の場所を同じように管理するのではなく、一部分を試してやるんですね。試してやってそれが正解ならそのやり方を拡げてやっていく。失敗なら止めるということが必要です。

8 茅ヶ崎里山公園の話

保全管理計画とエリア設定

ここからが里山公園の話になります。

県立茅ヶ崎里山公園は、2001年に開園しました。その頃は、生き物の多様性など残念ながら考えていなかったのです。そのために自然が壊されていったということがあり、市民みんなで何とかして欲しいと要望したり、交渉を重ねて少しずつ今の形になってきました。

今から8年ぐらい前に、里山公園の保全管理計画ができました。その時に、「1. 里山文化の継承」、「2. 生物多様性(の保全)」、「3. 環境教育」、「4. レクリエーション」の4つの目標が立てられました。

公園なのでなかなか保全管理計画に沿った管理ができていないわけではないのですが、目標が明記されて、一歩前進しました。

「1. 里山文化の継承」、「3. 環境教育」とありますが、「1」から「3」が相俟って進めていければ、谷戸の自然環境もより良い方向に向かっていくと思います。

「4. レクリエーション」、ここが一番難しいですね。レクリエーションと自然が結構バッティングする事があるので、ここをいかにすりあわせるかという所はあります。その時にひとつ大事だったのは、里山保全エリアというエリア設定をしていたことですね。ほかのエリアも配慮しないというわけではないのですが、特にこの中は、生物多様性に配慮しようという申し合わせができていたので、これが大きな力になりました。

里山公園は指定管理者として神奈川県公園協会が管理していますが、里山の保全管理を実践するに当たって、ここに関わる人たちによって茅ヶ崎里山公園運営会議ができました。

ただ運営会議と言っても、集まりが年に2回あるだけなので、実質的に行動ができるわけではありません。そこで、実際に保全管理計画を動かしていくための組織が必要だと言うことで、里山公園の保全部会ができました。最初は試行的に開かれたのですが、そのあと定例化されて年間11回の打合せをしています。初期の頃はまだ公園整備が途中でしたので、県の藤沢土木事務所や、公園協会の職員の人と一緒に保全部会のメンバーが集まって、整備するときのやり方など、例えば崖地を整備するときには土が間に入るような構造にするとか、以前は種子の吹きつけをしていたのを、「それは外来種の持ち込みになるので絶対にだめだから、種子を入れないで土だけにしてください」などの考えが盛り込まれ、生物多様性に配慮した工法が採用されまし



里山公園に設定された里山保全エリア

た。どういつ時期にどういつ刈り方をするかというどういつ打合せもができるようになって来て、だいつ配慮が届くようになって来ました。

実際にどんなことをしているかということを、午後から実際に見ていただこうと思うのですが、全部を一度に刈らないで、必ず刈り残す場所を設けてもらうようにお願いしました。管理方法を少し変えてしていただいたおかげで、先ほども紹介しました、オナガササキリとかショウリョウ

バッタモドキがものすごく増えまして、今や子どもたちの虫取りの一番良い場所になっています。

芹沢の池は、もともとここはオギの生える湿地でした。この池を作るとき、オギのあるところの土だけは残しておいて、また戻してもらったので、まわりにはオギが再生しました。オギを全部一度に刈られると困るので、園路から3~4m位は刈り、その内側は刈る場所と残す場所でローテーションさせる。外側を刈るときは内側を残す、内側を刈るときは外を残すというように、必ずオギの原が一年中どこかにまとまって残っている、というように刈り方をしてもらいました。

このように管理している場所には生き物への配慮していることを伝える看板を出しています。利用者の中には、草が生えていると管理していないじゃないかとクレームをつける方もいます。「こういう目的で管理をしているのです」というメッセージを出してあげると、理解していただける方も増えるかなと思うので、看板を出すということは大事です。

田んぼとして管理している所でも多様性の維持が大事なので、田んぼとオギの草地が隣り合うようになっています。

田んぼ、畑とか竹林は、ここで活動している里山公園倶楽部というグループが管理しています。ここでは農薬を若干は使うところもあるのですが、生きものに配慮してできるだけ使わないようにしています。

作物の収量を目的としないのが大前提なので、ジャガイモなどはニジュウヤホシテントウが大発生して、葉っぱがぼろぼろになっても、まあ良いかなというように感じてやってくれています。

農的な空間は作るけれど、それは作物を収穫するのが一番の目的ではなく、生き物のための手入れをしていただいている、これも言ってみれば生態系管理になっていくのかなと思います。

理想的とは言えない所もあるのですが、保全部会ができて十年ぐらになり、だんだん生態系管理の方向が定着してきて、それによって生物多様性が高まっているという効果がでています。今後も、こういう管理の仕方を続けていけるといいと思っています。